

メッサラのゲニウス

Tibullus 1.7の解釈の試み

日向太郎

(1) non sine me (1.7.9)

ティブッルスは、第1巻第7歌において、自らのパトロンであり、アウグストゥス政権下の有力者であったメッサラ¹の誕生日を祝している。歌の冒頭で「この日hunc diem (1)」と言われている誕生日は、メッサラの凱旋式が挙行される記念の日となることを運命づけられていた²。彼のアクイーターニア遠征での勲功 (3-4) とそれを讃える凱旋式の模様 (5-8) が簡潔に述べられた後、以下のようなcoupletが続いている。

non sine me est tibi partus honos: Tarbella Pyrene
testis et Oceani litora Santonici, (1.7.9-10)

non sine me est tibi partus honosの解釈をめぐり、これまでに様々な議論がなされてきた。多くの研究者は、me=作者、tibi=メッサラとみなし、honosを戦場における栄誉と解する³。そして、この詩句

¹アクティウムの海戦後のメッサラによるガリア遠征については、cf. Appianus *Bella Civilia* 4.38 (161) ὁ [i.e. Octavianus] δὲ αὐτὸν [i.e. Messalla] ὑπατὸν τε ἀπέφηνεν ἀντὶ αὐτοῦ Ἀντωνίου, ἀποχειροτονηθέντος, ὅτε αὐτῆς ἐψηφίζετο εἶναι πολέμιος, καὶ περὶ Ἄκτιον ναυαρχήσαντα κατὰ τοῦ Ἀντωνίου στρατηγὸν ἐπεμψεν ἐπὶ Κελτοῦς ἀφισταμένους καὶ νικήσαντι ἔδωκε θριαμβεῦσαι.

²*Acta Triumphorum Capitolina* (CIL I², 50, 180) によれば、紀元前 27 年 9 月 25 日に催行された。

³Klingner, 130; Smith, 34-5; Putnam, ad loc.; Della Corte, ad loc.; Cairns (1972), 167-8; Id. (1979), 34; Murgatroyd, ad loc. Elder も詩人がガリア遠征に加わったという説に

を「私なくしてはあなたは戦場の榮譽を得ることはなかった」の意味に取る。つまり、作者はパトロンの指揮する戦争で、少なからぬ貢献を示したことになる。彼らは、『ティブッルス伝』の以下の記述がそのことを裏付けるものだとする。

Albius Tibullus, eques Romanus, insignis forma cultuque corporis observabilis, ante alios Corvinum Messallam oratorem dilexit, cuius etiam contubernalis Aquitanico bello militaribus donis donatus est. (*Vita Tibulli*)

しかし、Maltbyはこの伝記情報の作者がティブッルスの出征の証拠を把握していたわけではなく、そもそも1.7.9の詩句に基づいてこのように記しているに過ぎないのではないかという、誠にもっともな疑いを述べている⁴。

たとい、伝記情報が史実を反映しているとしても、この文脈における詩人による自身の武勲への仄めかしは奇異だと言わざるを得ない。第1巻第7歌の目的はメッサッラの武勲を讃え、彼の誕生日を祝うことであろう。自らの手柄への言及は、およそそのような目的にそぐわない⁵。また、ここで想定されている手柄についての自負はおろか戦争への参加自体が、第1巻の他の歌でティブッルスが戦争や武勲に対し示している消極的態度とは対照的であり、

傾いているように見えるが、はっきりと断言はできないという。しかし、11-2の一見平板に見える河川の名前の列挙から、遠征の不参加を断ずるのは誤りだと考えている。

⁴Maltby, ad loc.

⁵したがって、第7歌9行は詩人が「愛」の支配を受ける前の軍事経験を暗示しているという Lee-Stecum (210) の解釈も成り立たない。

矛盾しているように思われる。とりわけ、1.1.53-8はそのことを端的に示す⁶。

te bellare decet terra, Messalla, marique,
 ut domus hostiles praeferat exuvias:
 me retinent vinctum formosae vincla puellae,
 et sedeo duras ianitor ante fores.
 non ego laudari curo, mea Delia: tecum
 dum modo sim, quaeso segnis inersque vocer.

パトロンには海や陸で武勇を示すのがふさわしい一方で、「私」には故郷で色恋にうつつを抜かし、でくの棒呼ばわりされるのが性に合っている。所詮メッサッラはメッサッラ、「私」は「私」なのである。

honos=戦場における栄誉とみなす支配的な解釈に対し、たとえばKonstanは、honos=凱旋と考え、問題の詩句は「凱旋のとき私もそこに居合わせていた」を意味するに過ぎないと言っている⁷。しかし、Maltbyは、partusの語を視野に入れれば、この解釈はありそうもないとしている⁸。そもそも詩人は数行前でnovos pubes Romana triumphos/ vidit ... (1.7.5-6) とすでにローマ全市民が凱旋に立ち会ったことを仄めかしているから、ここで改めて凱旋式における「私」の存在を訴える必要は認めがたい。

「私なくしてはあなたは戦場の栄誉を得ることはなかった」と詩人が言うとき、当然のことながら彼の貢献の可能性としてもう一つ考えられるのは、詩によってパトロンを讃えることである。

⁶Cf. Moore, 423-4.

⁷Konstan, 174.

⁸Maltby, ad loc.

誉れは詩によって讃えられてこそ多くの人々の知るところとなり、後世の人々に語り継がれるものである。だから、1.7.9でティブッルスは、自分の果たした詩的創作による貢献を自負しているのだと考える研究者もいる⁹。だが、第1巻のどの歌を見ても、自負にふさわしいような表立ったメッサッラ讃辞は見当たらない。まさにこの第7歌自体がメッサッラを讃えているのではないかと見る向きもあるかも知れないが、*est tibi partus honos*と用いられている動詞は完了形なので、第7歌による貢献とは考えられない。そもそも、この解釈では後続部分との折り合いが悪い。

non sine me est tibi partus honos: Tarbella Pyrene
testis et Oceani litora Santonici,
testis Arar Rhodanusque celer magnusque Garunna,
Carnutis et flavi caerulea lympha Liger. (1.7.9-12)

*testis*として挙げられている、タルベッリー族の（居住するあたりの）ピューレーネー山脈だとか、サントネス族の住む大西洋岸だとか、諸々のガリアの河川はあくまでもメッサッラの勲功の証言者なのであり、残念ながら詩人が詩的創作を通してパトロンの栄光を高めたことまでは証言してくれない¹⁰。

⁹Cf. Hammer; Leach, 90.

¹⁰多くの研究者が指摘するように、1.7.9-12はCatullus 64.356-60を踏まえたものだと考えられる。メッサッラの勝利と凱旋はバルカエによって予言されたものであり、彼の武勇については河川が証人になるという概念は、Catullus 64でやはりバルカエがアキレウスのトロイアにおける武勲を予言し、スカマンドロス河が証人となってくれるだろうと語っていることに通ずる。Gaisser (223)は、詩人がカトゥルスの上記一節への暗示によって、メッサッラをアキレウスになぞらえ、このパトロンの栄光を高めていると考える。Catullus 64との比較からも、ガリアの河川はメッサッラの軍事的功績を証言する役割を担っていると考えるべきだろう。

つまり、軍事的貢献であれ、文学的貢献であれ、詩人ティブツルスの貢献を読みとるのは、文脈上かなりおかしいことになる。だからこそ、BaehrensもHousmanも non sine meの読みに疑いを抱き、前者は non sine me est tibiのかわりに non sine Marte ibiと、後者は non sine meのかわりに non sine re という読みを提唱しているのだろう¹¹。どちらの読みでも、後続部分とのつながりは問題ない。

しかし、これらの修正案を採用することは、その場しのぎの感を免れ得ず、安易な解決法だろう¹²。1.7.9に小手先の介入をせず、この歌の枠組みを見直すことによって、別の解釈の余地を見出すことができるのではないだろうか。以下、新しい解決案を探ってみたい。

(2) 1.7.49-54

第7歌にはもう1つ、まったく意味が通らないというわけでもないが、長らく研究者たちがある種の違和感を払拭できない問題箇所がある。ガリアの地理的名称の列挙に引き続いて、13-20では、メッサツラの業績と関わりのある東方の自然や都市が、歌の主題

¹¹Murgatroyd(317)やLuckは、non sine reをHousmanの読みとして掲げるが、彼の著書や論文集を探しても見つからない。出所は確認できない。Ball(109)は、HousmanがPostgateに個人的に教示した読みだろうと考える。Postgateの編んだ*Corpus Poetarum Latinorum*, London, 1893の当該箇所のapparatus criticusには、この読みがHousmanのものであることが示されている。しかし、PostgateのOCT版のapparatus criticusにはこの読みは挙げられておらず、むしろ彼が「正しい」と考えるのはBaehrensの読みである。

¹²Ball(110)(Since nobody has presented a more satisfying alternative, one would do well to consider the elegant yet neglected emendation suggested by Housman almost a century ago.)はあまりに消極的すぎる。Mooreは、1.7に数多く認められる本来対立し合う要素を指摘し、そのような要素の共存状態が1.7を特徴づけると考えて、1.7.9はその一例に過ぎないとしているように見受けられる。しかし、1.7の詩人の戦争に対する態度と第1巻の他の作品におけるそれとの食い違いは、より根本的なものであり、彼が1.7に指摘するその他の対立とは十把一束に論ずることはできない。

とはなり得ないにせよ、全く触れないではいられない事物として挙げられている。そして、これら東方の驚異に引き続いて、ナイル河の神秘についての言及がなされる (21-8)。この神秘に関連して、エジプトのオシーリス信仰とオシーリスのもたらす恩恵が数え上げられている (29-48)。ここまでは、描き出されるイメージはめまぐるしく変化するものの、詩の進行はまことに円滑で、いささかの破綻もない。視点は、首都における凱旋式から始まって、まるでローマの支配領域をぐるりと一周するかのようにして、再び首都における誕生日祝いの席に戻ってくる。だが、問題は49-54である。

huc ades et Genium ludis centumque choreis
 concelebra et multo tempora funde mero:
 illius et nitido stillent unguenta capillo,
 et capite et collo mollia sarta gerat.
 sic venias hodie: tibi dem turis honores,
 liba et Mopsopio dulcia melle feram.

直前の43-8ではオシーリスへの呼びかけ (Osiri [43]) を伴い、この神に相応しきものと相応しくないものが挙げられている。したがって、huc ades (49) やconcelebra (50)、funde (50) といった命令法もオシーリスに向けられていると解されてきた。すでに35-42において彼は葡萄栽培の創始者、葡萄酒の発明者として性格づけられているから、オシーリスはバックスと同一視された存在として呼び出されていることになる。また、illius (51) は守護神ゲニウスを指し¹³、その髪に香油が注がれるよう、首には花輪が掛

¹³Smith, ad loc.; André, ad loc.; Putnam, ad loc.; Della Corte, ad loc.; Murgatroyd, ad loc.; Maltby, ad loc.

けられるよう命ぜられている。ここで言われているゲニウスは、偶像として実際に儀式の場に鎮座していると見るべきであろう。実際、コルヌートゥスの誕生日を祝う第2巻第2歌においても、ゲニウスは偶像として登場しているのである¹⁴。

たしかに、オシーリス (=バックス) は踊りや酒がふさわしい存在かも知れない。しかし、ゲニウスのための儀式にこの神が呼び招かれ、あれこれと儀式進行の指図を受けるとするのは、やはり奇妙である¹⁵。さらに、*sic venias hodiernae* (53) で「今日の(神)」と呼びかけられている二人称主語はゲニウス以外に考えられないが、もうすでにゲニウスの像は儀式の場に来ているはずだから、「このように来るがよい」という言い方は成り立たないはずである。それ故に、LeeやMaltbyの説明、“*sic refers to the conditions for his coming* (i.e. 49-52)”は受け入れ難い¹⁶。48以前の円滑な進行を思えば、現行の49-54のぎこちなさにはテキスト伝承上の混乱を認めざるを得ず、どうしても介入が必要だろう。

ゲニウスに対する儀式を描写した1.7.49-54の混乱ぶりは、上記の第2巻第2歌冒頭(1-8)の整然とした祭儀の描写と比較すれば、一目瞭然である。

¹⁴Lee, ad 2.2.5; Maltby, ad loc. cf. Putnam, ad 1.7.51-2.

¹⁵Smith (ad 1.1.37-8)の指摘するように、神々に参加を呼びかけること自体は古代世界にあって、ごく普通のことだろう。だが、神を招待することと、儀式に加わってその進行に携わるように呼びかけることとは別問題である。Koenenは、オシーリスもしくはサラーピスが宴の席の参加者とも、主催者ともなっている例を含むピュルス資料を挙げているが(154 n.105)、神が儀式そのものを執り行う存在として登場している例は認められない。

¹⁶Lee, ad loc.; Maltby, ad loc. Koenen(153 n.104)は、53-4を *sic venias hodiernae, tibi dem turis honores/ liba et Mopsopio dulcia melle feram.* と *hodiernae* のあとは、ピリオドではなくコンマを打ち、“Come to me today in order that I may honor you with the smoke of incense and bring you sacrificial cakes sweet with the honey of Attica.”と訳している。*sic* は *tibi dem turis ...* を先取りしていると見なす。しかし、これも Lee や Maltby の説明を棄却したのと同じ理由で、受け入れられない。

Dicamus bona verba: venit Natalis ad aras:
 quisquis ades, lingua, vir mulierque, fave.
 urantur pia tura focus, urantur odores
 quos tener e terra divite mittit Arabs.
 ipse suos Genius adsit visurus honores,
 cui decorent sanctas mollia sarta comas.
 illius puro destillent tempora nardo,
 atque satur libo sit madeatque mero,

「我々は良き言葉を口にしよう (=口を慎もう)。誕生の神 (=ゲニウス) が祭壇にやって来る。誰であれ近づく者は、男も女も、言葉を慎め。炉には敬虔な乳香を焚きしめるがよい、豊穰なる土地から柔弱なアラビアが送る香を焚きしめるがよい。他ならぬゲニウスが自分に対する捧げものを見にやってくるようにせよ。彼の神々しい髪が、柔らかい花輪で飾られることなるように。彼の額に香油が注がれ、菓子によって満腹になり、生酒が滴ることなるように。」

一連の儀式の進行に携わるのは、まずあくまでも人間のみである。そして、描写のなかで *urantur* の繰り返しによって、際立った扱いを受け、それ故に儀式における重要性を担っているのは乳香である。最初に乳香が焚きしめられ、儀式の厳かな空間が演出される。そして、それが合図のように、他ならぬゲニウスの像が運び込まれる。花輪、香油、菓子、神酒などのお供え物はその後で捧げられるのである。

またケリントスの誕生日を祝している、*Corpus Tibullianum* 3.11.9 (=4.5.9) でも、*magne Geni, cape tura libens votisque faveto* とあり、乳香 (*tura*) がゲニウスへの供物を代表するものとして挙が

っている。また、3.12では女性にとっての守護神ユーノーへの呼びかけがなされ、歌い手は女神にまず香を受け入れるようにと命じている (Natalis Iuno, sanctos cape turis acervos)¹⁷。

2.2の描写と比較すると、1.7の現行のテキストでは、乳香についての言及が神酒、花輪、香油よりも後になっており、副次的な扱いである。しかし、上述のように2.2などで明示されている乳香を焚くことの重要性を顧慮するならば、本来これが最初に挙げられるはずである。したがって、まず以下のように行の移動がなされるべきであろう。

sic venias hodierna: tibi dem turis honores,	53
liba et Mopsopio dulcia melle feram.	54
huc ades et Genium ludis centumque choreis	49
concelebra et multo tempora funde mero:	50
illius et nitido stillent unguenta capillo,	
et capite et collo mollia sarta gerat.	
at tibi succrescat proles quae facta parentis	
augeat et circa stet veneranda senem.	

この一節の大意は、さしあたって以下のようになるだろう。「そのように来るがよい、今日の神様よ（この一文の解釈については、本考察 (3) で後述する）。あなたに私 (=ティブッルス) は乳香を捧げ、アテーナイの蜜で甘い菓子をお供えます。[メッサツラよ]

¹⁷オウィディウスも、流刑地での自らの誕生日を歌った *Tristia* 5.5.11-2 において、捧げるべき供物として真っ先に乳香を挙げ、それから酒を献ずるよう下僕に指示している (da mihi tura, puer, pingues facientia flammis, / quodque pio fusum stridat in igne merum.)。その後も香に焦点が定められ、詩人の心を察するかのように煙が祖国の方へと流れていく様子を歌っている (aspice ut aura tamen fumos e ture coortos / in partes Italas et loca dextra ferat. / sensus inest igitur nebulis, quas exigit ignis: / consilio fugiunt aethera, Ponte, tuum. [Ibid. 29-32])。

こちらへ来て、ゲニウスを百の遊戯と踊りとで一緒に讃えましょう。その額に大量の生酒を注いでください。そして彼の輝く髪に香油が滴り、首と頭には柔らかい花輪が掛かるようになさってください。一方あなたには、子孫が成長しますように。そして、親の事績を拡大し、立派な人物となって老齢のあなたを取り巻きますように。」

huc ades と呼びかけられているのは、オシーリスではなく、儀式に参加している人物で、ゲニウスの保護を受けているメッサツラであると考えるのが自然である。詩人は、「*at tibi succrescat proles ...* 一方あなたには、子孫が成長しますように...」と引き続きメッサツラに呼びかけ、今度は彼の幸福を祈願しているのである¹⁸。

(3) *sic* (53) の内容

(2) で提案した移動によって、*sic* とは何を指すのかが改めて問題になるが、ここで再び 1.7.9 に戻ってみる。*non sine me est tibi partus honos* については、*me*=作者とみなし、詩人ティブッルスへの貢献を想定した解釈には無理があることはすでに確認済みである。しかし、1.7.9 が作者の地の言葉ではなく、誰かの言葉の直接引用に含まれると考えれば、問題解決の道は開けるのではないか。*sic* は、まさにその可能性を示唆している。

¹⁸このような行順にしたとき、53-4 の *tu* がゲニウスである一方、49-50 の *tu* はメッサツラに変わるというのは、唐突であるとの謗りは免れないかも知れない。しかし、このような *tu* の意味する人物の急激な移り変わりは、現行のテキストにも認められることである。53-4 で *tu*=ゲニウスである一方、55-6 では *tu*=メッサツラである。しかも現行のテキストでは 49-52 では *tu*=オシーリスであるから、49-56 の範囲で呼びかけの対象はめまぐるしく変わっている。私案によれば、49-50 では *tu*=メッサツラであるが、その後結びの *couplet* である 63-4 (*at tu, Natalis multos celebrande per annos / candidior ... veni*) まで変化はなく、こちらの方がより問題は少ない。*illius* (=ゲニウス [51]) と *tibi* (=メッサツラ [55]) との対比も生き、*at*(55) の意味も明確になる。

それでは、話者は誰だと考えるべきだろうか。「あなた (=メッサッラ)」に向かって「私なくしてはあなたは榮譽を得ることはなかった」と何の躊躇もなく言う資格があるのは、神以外には考えられない。そして、第7歌で問題になっている神といえば、ゲニウス以外あり得ない。

紀元後3世紀のケーンソーリヌスによれば、ゲニウスは、誰であれ生を受けた人がその保護下にあるとされる神である¹⁹。ケーンソーリヌスはさらに、「ゲニウスはその一方で、我々を絶えず見守る者として割り当てられ、片時も離れることなく、母のお腹に宿ったときから生の最後の日まで付き添うのである²⁰」として、ゲニウスとその保護下にある人物との絆を強調している。だとすれば、1-4にあるようなパルカエの予言

Hunc cecinere diem Parcae fatalia nentes
 stamina, non ulli dissoluenda deo:
 hunc fore, Aquitanas posset qui fundere gentes,
 quem tremeret forti milite victus Atax.

(この日をパルカエは歌った、運命の糸を紡いで。それこそはいかなる神にも解くことのできないもの。「この日がアクイーターニーの諸部族を蹴散らし、強き兵に敗れたアタクスが震撼する日となろう」と。)を伝えたり、ガリアから東方世界、エジプトに至るまでメッサッラの訪れた土地を次々と挙げ、特徴づけるのに、ゲニウス以上に適した存在はない。そして、「私なくしてはあなたは

¹⁹Censorinus 3.1 Genius est deus, cuius in tutela ut quisque natus est vivit.

²⁰Id. 3.5 Genius autem ita nobis adsiduus observator adpositus est, ut ne puncto quidem temporis longius abscedat, sed ab utero matris acceptos ad extremum vitae diem comitetur.

荣誉を得ることはなかった」とは、守護神ゼニウスの言葉と考えるべきではないか。

以上のように1.7.9の詩句が成り立つ可能性を追求し、(2)で想定した行の移動に基づいて考察を推し進めるならば、現行のテキストで詩人の地の言葉と見なされてきた1-48は、実はゼニウスに帰せられることになる。直後のsicは、この神の言葉を指している。

この場合、sicはveniasという動詞は伴っても、言説動詞を欠くことになる。だが、言説動詞の省略はあり得ないことではない。例えば、ウェルギリウス『農耕詩』や『アエネーイス』にはそのような省略例が認められる。

haec Proteus, et se iactu dedit aequor in altum (*Georgica* 4.528)

sic Venus et Veneris contra sic filius orsus (*Aeneis* 1.325)

sic prior Aeneas, sequitur sic deinde Latinus (*Aeneis* 12.195)

Maltbyによれば、ティブッルス第1巻第4歌冒頭(1-8)の以下の例は、このような叙事詩的な省略様式を模倣したものである²¹。

‘Sic umbrosa tibi contingant tecta, Priape,
ne capiti soles, ne noceantque nives:
quae tua formosos cepit sollertia? certe
non tibi barba nitet, non tibi culta coma est;

²¹Maltby, ad 1.4.7. なお、この他の多くの例については、Maltbyが参照を促しているように、McKeown(ad *Amores* 2.5.33-34)の指摘が役に立つ。彼の挙げている例は、本文中に引用したもの他に、Ovidius *Amores* 3.[5].33, *Heroides* 10.37, 14.67, *Remedia* 39; Vergilius *Ecloga* 8.62, *Aeneis* 3.99; Propertius 1.16.45である。この他Fedeli(ad 1.5.17)及びPinotti(ad 39)の指摘も有用である。Fedeliはverbum dicendiの省略を喜劇によく現れる言い方だとしている。一方Pinottiは、Maltby同様省略を本来叙事詩的な文体と見なしている。Cf. *Aeneis* 8.469, 10.16; Propertius 2.29.11, 3.3.51, 3.24.11, 4.1.119, 4.9.51, 61.

nudus et hibernae producis frigora brumae,
nudus et aestivi tempora sicca Canis.’
sic ego: tum Bacchi respondit rustica proles
armatus curva sic mihi falce deus.

sic (7) は、1-6の「私」の言葉の直接引用部分を指しているが、引用が冒頭からいきなり何の前触れもなく始まり、言説動詞を欠いたsicで締めくくられているという点で、本考察が第7歌に想定するゲニウスの言葉の直接引用に類似していることになる。

冒頭から何ら言説動詞を挿まないで、これ程長い直接引用の言葉が導入され、それが言説動詞を省略したsicとともに結ばれるという現象は異例だと言えるかも知れない。しかし、類似例をまったく欠くわけではない。オウィディウス『恋の歌』第3巻第5歌においては、「私」は女占い師に自分の見た夢をつぶさに語り、彼女がそれに解釈を示す。「私」が夢を叙述する直接引用の言葉 (1-32) は、まったく言説動詞を伴わずにいきなり導入され、30行以上も続き、やはり言説動詞を欠いたsic egoの短い語句で簡潔に締めくくられている。

ただし、以上のようにsic venias hodie!には言説動詞が省略されていると考えるとき、命令を表すveniasはsicという副詞から遊離しているので、詩人のコメントの挿入と見なさざるを得ない。そこで、sic (venias!) hodie. («そのように [あなたは言います]、(来てください!) 今日の神様よ) と記すのがよいと思われる。

そして、神像が語るという設定、その有り難い言葉が歌の大半を占めるという様式は、上に挙げた1.4に例がある。1.4では、プリアープスの木像に詩人が美少年の心を掴むにはどうしたら良いかを問い (1-6)、プリアープス像は少年愛の指南役として、美少年攻略の手管を簡潔ながらも体系的に伝授している (9-72)。頑なな少

年が念者に心を開き、念者に進んで接吻を与える過程を、像は具体的場面を示しながら段階的に述べている。その後拝金主義のはびこる現代を激しく批判し(57-60)、少年たちに呼びかけ、詩を(つまりは貧乏な詩人を)尊ぶよう奨励する。61-72はムーサに対する称賛の言葉(及びムーサを蔑ろにする者への呪詛)が込められている。一方、1.7.1-48の構成については、すでに述べた通り、ローマの凱旋式の描写に始まり、ガリア、中東、エジプトとローマの支配領域を一周するかのように歌い手の視点が連続性を保ちながら動く。こちらは、簡潔ながらも世界が点描され、空間的な体系が具現されていると言えよう。そしてその後、やはり1.7でもオシーリスに対する称賛が突出した形でなされている(29-48)。したがって、1.4.6-72と1.7.1-48には、いわば「簡略的体系描写(叙述)＋特定の神の称賛」という構成上の共通性を認めることができる。「物語る神々」という設定を1.7にも想定することは、決して奇警ではない。さらに言えば、軍事的功績についての表立った称賛を別人格に帰するという手法は、(1)で指摘したようなティブツルス自身の平和主義者としての立場、戦争忌避の態度をある程度維持することにも資するだろう。

(4) オシーリスとゲニウス

残された問題は、1-48の大半を占めるオシーリス礼賛とゲニウスの関係である。1-48がゲニウスの言葉であるとすれば、なぜ彼はオシーリスを称賛しているのか、という疑問が当然湧いてくる。両者の接点については、すでにKoenenが指摘している²²。そこで、本考察では主に彼の考察を踏まえつつ、1.7におけるオシーリス礼賛の意味を検討したい。

²²Koenen, 154-7.

まず第一に、Geniusという名前自体が、動詞gigno（生む）に由来している。アウグスティヌス『神の国』第7巻第13章において引用されているウァッローの説明によれば、ゲニウスとは「すべてを生成する役割を任せられ、その権能を有する神²³」であるともされている。この他、パウルス・ディアコヌスも（そして恐らく、フェストゥスやウェッリウス・フラックスも）ゲニウスについて類似した証言を行っている²⁴。この点でゲニウスは、エジプトにおける生命の源、ナイル河と同一視され、穀物栽培、葡萄栽培の創始者と見なされているオシーリスに通ずる。

第二に、ゲニウスの像の実際例にかんして言えば、彼は通常若い男性の姿によって具現され、そのattributeはcornucopiaであることから、豊穡の神としての役割を認めることができよう²⁵。46で言われている脛まで覆い隠す丈の長い衣装(fusa ... ad teneros lutea palla pedes)は現存する多くのゲニウス像に認めることができる²⁶。そして、ゲニウスが蛇の姿をとって自身が守っている家の住人たちの前に現れることは、よく知られている。腕や頭部に蛇が巻きついている図像例も知られている²⁷。Koenenによれば、同じように、オ

²³Augustinus *De Civitate Dei* 7.13 Quid est Genius? “Deus,” [Varro] inquit, “qui praepositus est ac vim habet omnium rerum gignendarum.”

²⁴Paulus Diaconus *Excerpta ex libris Pompei Festi De Significatione Verborum* 94-5 M.=84 Lindsay Genium appellabant deum, qui vim optineret rerum omnium gerendarum. Cf. Wissowa, 175; W. F. Otto, *RE* s.v. ‘Genius’, 1156-7; Brink, 441; I. Romeo, *LIMC supplementum I* s.v. ‘Genius’, 599.

²⁵Romeo, *LIMC supplementum II* s.v. ‘Genius’, 372-7. なお、サラピスの図像のなかにも、右手に杯、左手に cornucopia を携えて立ち、ゲニウスの典型的所作をそっくり示している例も認められる。Cf. G. Clerc & J. Leclant *LIMC VII.2* s.v. ‘Sarapis’, n. 26a, 123.

²⁶Cf. Romeo, *LIMC supplementum II* s.v. ‘Genius’, 372-7(n.1, 2, 8, 9, 11, 18, 22, 24, 30, 36, 31a, 38, 42, 57, 60, 61, 62, 63).

²⁷Romeo, *LIMC supplementum II* s.v. ‘Genius’, n.2(372). この他、n.4, n.36 にはゲニウスの近くに蛇の姿が描かれている。

シーリスがギリシアの神々と統合した結果できたサラーピス神も蛇の姿で現れ、イーシス神同様、彼の像の頭部には蛇がまわりついているという。ポンペイイーやヘルクラネウムのラレースの神域には、家を守る伝統的な神々と共にエジプトの神々が祀られている例も認めうる²⁸。

第三に、何よりも1.7.49-54においてゲニウスに捧げられている乳香、蜂蜜入りの菓子、花冠、葡萄酒はいずれも、ボックスに同一視されるオシーリスと関わりの深いものである。オウィディウスは『祭暦』第3巻727-36で、乳香、蜂蜜、菓子 (liba) を捧げる習慣の起源を歌っている。

Ante tuos ortus arae sine honore fuerunt,
 Liber, et in gelidis herba reperta focus.
 te memorant, Gange totoque Oriente subacto,
 primitias magno seposuisse Iovi:
 cinnama tu primus captivaque tura dedisti
 deque triumphato viscera tosta bove.
 nomine ab auctoris ducunt libamina nomen
 libaque, quod sanctis pars datur inde focus;
 liba deo fiunt, sucis quia dulcibus idem
 gaudet et a Baccho mella reperta ferunt.

ボックスが生まれる以前は神殿には供物が捧げられることがなく、竈には雑草がはびこった。オリエントやインドを征服し、彼はユピテルに初穂を捧げる。彼が初めて肉桂や乳香を献上した(731)。とりわけオウィディウスが強調しているのは、菓子の由来(733-6)である。「供物 (libamina) やお供えの菓子 (liba) は創始者の名前

²⁸Koenen, 155.

(Liber) にちなんでいる。というのも、その一部は後で彼の神聖なる竈に捧げられるから。お供えの菓子はこの神のために作られるが、それというのも、他ならぬボックスが甘い蜜を喜び、人々の言うところでは、甘い蜜はボックスによって発見されたから」と述べ、蜂蜜の発見と採集についての縁起譚が後に続くのである。そして、縁起譚をまとめる761-2では、「父なる神 [ボックス] は蜂蜜を喜ばれる。我々は熱い菓子に輝く蜂蜜を塗り、然るべくその発見者に捧げよう (*melle pater fruitur liboque infusa calenti/ iure repertori splendida mella damus.*)」と歌い、発見者に対する感謝の気持ちから、蜂蜜入り菓子のお供えがボックス崇拝においても行われていたことが歌われている。

以上から、ゲニウスとボックス=オシーリスの間には権能上、外観上の類似性があり、ゲニウスのお供えを創出したのは、他ならぬボックス=オシーリスである。オシーリス讃歌の中で挙げられている穀物栽培、葡萄栽培、多種多様な花々、特色のある服装は、ゲニウスへの連想をも含んでいる。このような連想を生み出す一節は、ゲニウス祭儀の場面への移行を円滑ならしめている。それだけではない。実際、*sic (venias!) hodie*をもって、1-48の歌い手がゲニウスであったことが判明し、歌い手は自らの祭儀に不可欠な供物の発明者オシーリスに感謝の念を抱き、彼を熱烈に讃えていたことも明らかとなる。

(5) 結語

以上の考察から、ティブッルス第1巻第7歌について、次のような介入を提案する。53-4のcoupletを48の後に移動し、1-48をゲニウスの言葉と見なして引用符で囲む。また、*sic (venias!) hodie*と*venias*を括弧でくくって祭儀の雰囲気や昂揚した詩人のコメントと見なし、*sic*には言説動詞を補って解釈する。

こうした必要最小限の介入と工夫によって、non sine me est tibi partus honos (9)にかかわる解釈上の問題や49-54の混乱は解決する。戦争に対する不可解な詩人の態度の豹変を考える必要もなくなる。1-8における運命の実現にかんするコメント、9-28におけるメッサッラが足跡を残した土地に関する証言、29-48のオシーリス礼賛も、メッサッラの守護神であると同時にオシーリス=バックスの恩恵に浴しているゲニウスの歌う歌にふさわしい主題である。

第1巻第7歌の現行のテキストが抱える問題は、恐らくは表面的には意味がよく似ているsic veniasとhuc adesを混同し、後者を含むcouplet (すなわち現行の49-50) を1-48に続けて書写するという写本伝承上十分考えられる事態がきっかけで生じたものだろう。そうすることによって、sicの本来意味していた内容は不明確なものとなり、1-48はゲニウスの言葉ではなく、詩人の地の言葉として解釈されるようになったのだろう。

[反省の記

上記の考察中、とくにTibullus 1.7.53の解釈について、匿名の査読委員から以下のようなご指摘をいただいた。

「通常、直接話法の引用の後（または前）に言説動詞を欠く形の表現が来る場合、sicあるいはhaecなどともに主語となる名詞ないし代名詞が来るからこそ、それが発話の主であることが了解されるはずだが、この場合には主語となる（代）名詞はない。hodierneという呼格はそれに代わってその役割を果たすとは考えにくい（sicutu, hodierneとあるならばともかく）。しかも、そのsicと呼格とのあいだに詩人のコメントが挿入されると解するのは、さらに困難であろう。よりによって「(あなたは) こう語る、今日の神よ」とい

う言葉のあいだになぜ詩人が「来たりませ」という言葉を差し挟むのか、理解に苦しむ (venias, hodieが挿入句ならばまだしも)。」

直接話法の引用の前後で言説動詞を省略する場合、本論考の引用した諸例が示すように、通常sicやhaecの直後に主語もしくは主語人称代名詞が置かれる。したがって、本考察の解釈のようにコメントの挿入 (venias) があり、さらに主格ではなく、呼格 (hodie) が続くというのは確かに異例と認めざるを得ない。

だとすれば、省略されているのは定動詞ではなく、dicensやcanensのような言説動詞の現在分詞と見ることも可能だろう。その場合、veniasは詩人のコメント的な挿入と考える必要はなくなる (「そのように [言いながら] 来たりませ、今日の神よ」)。ただし、このような言説動詞の分詞が省略されている例は、今のところ見つかっていない。また、1-48のような詩行のあと sic venias hodie という言葉が続く場合、そこに言説動詞の分詞の省略を認めることのできる読者 (とくに聴衆) がいると考えるのも無理があるかも知れない。

あくまでも sic (53) に言説動詞の省略を見ようとするならば、53-4を48の直後に移動させた上で (古文書学的な変遷経緯の説明はひとまず措くとして)、veniasは本来Geniusであったと想定せざるを得ない。この場合、53は

sic Genius. hodie, tibi dem turis honores,

そのようにゲニウスは言った。今日の神よ、あなたに乳香のお供えを差し上げよう。

と句読点を打つべきだろう。Geniusの最後の音節は長いとせねばならないが、このような長音化の例は、Tibullus 2.2.5 (ipse tuos Geniūs

adsit visurus honores) にも認められる。とくにsic Genius. hodie, ... の場合には、長音化が意味の切れ目に合致することになるので、困難は少ないと思われる。ただ、この案を採択するには、Genius がveniasという写本の読みに変遷した過程を説明する必要があるろう。

あるいは、1.7のテキストはより深刻な損傷を受けている可能性もある。同じように個人の誕生日を祝う2.2と比較するならば、1.7には、2.2.1-2で真っ先になされているような参列者に対する沈黙の呼びかけが欠けている。まずは沈黙が命ぜられ、それから乳香が焚かれるのが誕生日祝いの習わしである。したがって1.7においても、直接話法の1-48の直後、移動した53-4の直前に、ゲニウスの言葉を結んだ上で一同に静粛を促すような一節が本来存在したと考えるのは自然なことではないだろうか。少し想像を逞しくすれば、例えば次のようなcouplet (48a-b) があったと仮定し得る。

et Tyriae vestes et dulcis tibia cantu	47
et levis occultis conscia cista sacris.”	48
sic Genius. Messalla, venit visurus honores	48a
ipse deus: lingua, vir mulierque, fave.	48b
sic venias hodie: tibi dem turis honores,	53
liba et Mopsopio dulcia melle feram.	54
huc ades et Genium ludis centumque choreis	49
concelebra et multo tempora funde mero:	50

48aがsic venias hodie. ... honores (53) と同じ行頭の語、行末の語を持つため、48a-bは53-4と混同され、書写の過程で欠落した。本来明白にゲニウスの言葉と解し得た1-48は、そのように理解されな

くなった。辻褃合わせとして、53-4も現行の位置に追いやられたの
だろう。

1.7.53についての本論考の提案自体には困難はあるものの、1.7.9
の問題を1.7全体の理解にかかわる問題と捉える必要性があること
を、この場を借りて重ねて強調しておく。]

文献表

- J. André, *Tibulle, Élégies, Livre Premier*, Paris, 1965.
- R. J. Ball, *Tibullus the Elegist. A Critical Survey*, Göttingen, 1983.
- C. O. Brink, *Horace on Poetry. Epistles Book II*, Cambridge, 1982.
- F. Cairns, *Generic Composition in Greek and Roman Poetry*, Edinburgh, 1972.
- , *Tibullus: A Hellenistic Poet at Rome*, Cambridge, 1979.
- F. Della Corte, *Tibullo. Le Elegie*, Milano, 1980.
- J. P. Elder, 'Tibullus, Ennius, and the Blue Loire', *TAPhA* 96 (1965), 97-105.
- P. Fedeli, *Sesto Propertio. Il primo libro delle elegie*, Firenze, 1980.
- J. H. Gaisser, 'Tibullus 1.7: A Tribute to Messalla', *CPh* 66 (1971), 221-9.
- J. Hammer, 'Tibullus 1.7.9', *Classical Weekly* 20 (1927), 128.
- F. Klingner, 'Tibulls Geburtstagsgedicht an Messalla (I 7)', *Eranos* 49 (1951), 117-36
- L. Koenen, 'Egyptian Influence in Tibullus', *ICS* 1 (1976), 127-59.
- D. Konstan, 'The Politics of Tibullus 1.7', *RSC* 26 (1978), 173-85.
- E. W. Leach, 'Poetics and Poetic Design in Tibullus' First Elegiac Book', *Arethusa* 13 (1980), 79-96.
- G. Lee, *Tibullus: Elegies*, Leeds, 1990³ (1975¹).

-
- P. Lee-Stecum, *Powerplay in Tibullus. Reading Elegies Book One*, Cambridge, 1998.
- P. Levy, 'Der Geburtstag des Freundes. Eine Studie zu Tibull I 7', *SIFC* 7 (1929), 101-11, 169-70.
- G. Luck, *Albii Tibulli Aliorumque Carmina*, Stuttgart, 1988.
- R. Maltby, *Tibullus: Elegies. Text, Introduction and Commentary*, Cambridge, 2002.
- J.C. McKeown, *Ovid: Amores vol. III* (a Commentary on Book Two), Leeds, 1998.
- T. J. Moore, 'Tibullus 1.7: Reconciliation through Conflict', *CW* 82 (1988-89), 423-30.
- P. Murgatroyd, *Tibullus I. A Commentary on the First Book of the Elegies of Albius Tibullus*, London, 1991 (1980¹).
- P. Pinotti, *P. Ovidio Nasone. Remedia Amoris*, Bologna, 1993² (1988¹).
- J. P. Postgate, *Tibulli Aliorumque Carminum Libri Tres*, Oxford, 1905.
- M. C. J. Putnam, *Tibullus: A Commentary*, Norman, 1973.
- K. F. Smith, *The Elegies of Albius Tibullus*, New York, Cincinnati, Chicago, 1913.
- G. Wissowa, *Religion und Kultus der Römer*, München, 1971(=1912¹).